掲載日:2016年01月12日，面名:二社，記事ID:KIJ20160112_A0022000100601001
(C)沖縄タイムス社

ここにいるよ
沖縄 子どもの貧困 ④

第1部 群像

親の不在狙って帰宅

二人そろうから食事の時間嫌い

12月上旬のある日、中学2年のカナ(14)は、制服の着方や染めた髪を改めてこなかったことで生徒指導室に呼び出された。

「『直してこい』と言われて帰されたけど、家には帰りたくない」とふてくされていた。「先生はうるさく注意してくるけど、両親は何も言わない」。親は自分に興味がないのだと、カナはそう思っている。

30代の両親と小学生の弟2人の5人暮らし。毎日朝食はなく、夜は母親がスーパーで2品ほど総菜を買ってくるが、1人当たりの量はわずかで、弟たちのことを考えると、カナはおかずに箸を伸ばせない。「両親がそろうことが多いから、食事の時間は嫌い」だという。

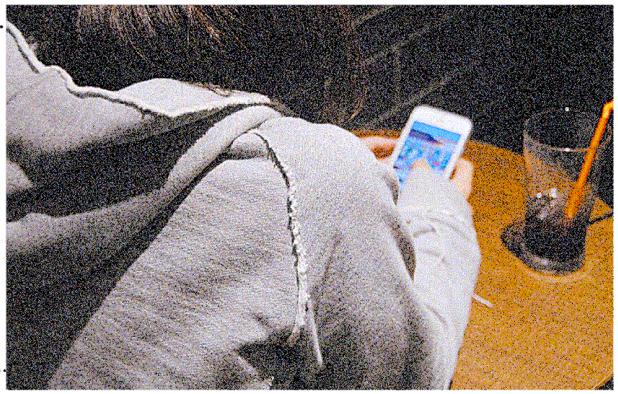
父親は自営業だが、経営状況は思わしくなく、昨年から会社を畳む準備をしている。専業主婦だった母親は、2年前からパートに出ている。

金銭面での口論が絶えない両親はいつも不仲で、父親はカナに当たってくることもある。「態度が悪い」「お前は親の言うことは聞かないくせに金ばかり掛かる」と怒鳴られ、頭をたたかれたこともある。

■ ■

居心地の悪い家庭から逃れるように、小学校高学年のころから放課後はまっすぐ家に帰らず、深夜徘徊するようになった。小遣いは一度ももらったことがない。欲しいものがあると万引するようになった。中学に進学してからの補導回数は10回以上だ。

昨年の夏、アクセサリーを万引して補導された。警察署に両親が呼び出されたが、2人は現れず、迎えに来たのは担任だった。「先生が来た時はびっくりしたけど、親が来なくてちょっと安心した。怒鳴られるはずだし、きっとたたかれる」



家に帰らずファストフード店で時間をつぶすカナ

家に帰ると、父親は予想通り、警察から連絡があったことに激怒し「もう帰ってくるな」と千円札を数枚投げつけた。

最近は、親がいない時間を見計らって帰宅する。鉢合わせしないように台所に行き、パンや飲み物を取って子ども部屋で食事を済ませている。

■ ■

那覇地区少年補導員協議会の田場豊さん(46)によると、貧困などの理由から生活に余裕がなくなった親が放任や虐待をするケースは多く、そういった家庭の子どもは、注目を集めたい一心で非行に走ることがあるという。「頭ごなしに否定していては、子どもは非行を繰り返すばかりだ」と指摘する。

学校を欠席することも多いカナは、勉強や進学にも意味を見いだせずにいるという。「今の心配は、親のイライラが弟たちに向いてしまわないか。2人には私みたいな『ヤンキー』になってほしくない」とこぼした。

(文中仮名)

(「子どもの貧困」取材班・松田麗香)＝火～木曜日掲載

記事に関するご意見、情報をお寄せください。
ファクス：098(860)3483　メール：kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp